

《温故知新プロジェクト》

行事食および儀礼食に関する実態と意識について
—若い世代の赤飯・寿司・精進料理の摂取状況—

宇和川小百合* 色川木綿子*

Actual Situation and Consciousness about
Event Food and the Courtesy Food

—Intake of Red Rice, *Sushi*, Vegetarian Food that Seen in Young Age—

Sayuri UWAGAWA and Yuko IROKAWA

1. 緒 言

「和食；日本人の伝統的な食文化」と題して、ユネスコ無形文化遺産に登録されたのは、2013年12月のことである¹⁾。その中で4つの「和食」の特徴が示され、日本人の食文化は、正月などの年中行事と密接に関わって生まれ、家族や地域の絆を深めてきた、と記されている。正月などの特別な年中行事の時には、昔から特別な料理や食べ物、あるいは神への供物などを捧げて、お祝いする習慣がある。行事には、宮廷で執り行われてきた行事と農作業などに関連する行事とがあり^{2)~4)}、近年では、バレンタインデーやハロウィーンなどの新しい行事も加わり、販売商戦が盛んになっている。行事食のなかには、日本の四季折々の旬の食材を使ったものや各地域の気候風土にあった地産地消の食材を使った郷土料理として、伝承されている料理もある⁵⁾。

そして、出産をはじめ、人の一生における節目の儀礼が執り行われている。あるいは、葬儀や法事などの不祝儀の時に行われる儀礼においても料理や食品がつきものである。そして、これらの年中行事や通過儀礼は、家庭、および親戚の集まりや地域の人々によって伝承されてきた。

しかし、高度経済成長期以降、社会を取り巻く環境が変化して、人々の食のあり方に影響を及ぼしている。世帯構造が変化して、夫婦と子どもの核家族が増えて、さらに高齢者だけなどの単独の世帯や晩婚化などによっても単身世帯が増加している。また、人口の都市化が進み、地方の過疎化が問題となっている⁶⁾。女性が主婦として家庭を守るという形態も減少し、男女共働きの世帯が増加⁷⁾している。それによって、ライフスタイルのあり方も多様化し、生活の価値観も多様化している。それらに加えて、家庭内で家族そろって食事をする時間も少なくなり、楽しんでコミュニケーションを図りながら食する機会は減少し、子どもの

孤食も問題となっている。食の外食、宅配、中食などの増加、食のグルメ志向や健康志向、食の安全などによっても、食事の内容に変化が見られる。

このような社会環境の変化にともない、年中行事や通過儀礼のあり方にも変化が見られ、実施される機会も減少している。また、行事食や儀礼食の内容についても変化が見られている。家庭や地域の中で伝習されにくくなっている状況のなか、若い世代の実態や意識について明らかにすることを目的とした。

2. 調査方法

1) 調査対象

(1) 調理科学会特別研究委員会による「調理文化の地域性と調理科学—行事食・儀礼食—」の全国調査データベースの中から関東地区（1都6県）調査の女性回答者、3,570名（以後、関東調査という）を20歳未満、20歳代、40歳代、50歳代、60歳以上と年代別に集計して検討した。30歳代は、41名と比較検討するには、数が少ないために除外した。

(2) 東京家政大学・短期大学の学生および卒業生にアンケート方式により調査（以後、本学調査という）を行った。在学生・卒業生合わせて489名、在学生はその場で回答、回収したので、回収率100%、卒業生は、郵送法にて回答を得たので、回収率34.5%で、有効回答率21.0%である。

データは、単純集計、年代間のクロス集計、 χ^2 検定により分析した。

2) 調査時期

(1) 関東調査：平成21～23年度調査

(2) 本学調査：平成25年10～11月

本学卒業生調査：平成26年8月～10月

* 東京家政大学 (Tokyo Kasei University)

3) 調査項目

(1) 関東調査

対象者の属性に関する基礎項目と行事食、儀礼食に関する105項目の中から、今回の研究に必要な行事および儀礼の認知度および経験、そして、赤飯、精進料理、寿司に関する項目について選択し、集計した。

(2) 本学調査

対象者の属性に関する基礎項目は、家族構成、出身地、調理者である。そして、行事および儀礼の認知と経験、赤飯・精進料理・寿司に対する実施や経験、意識などの質問である。また、この調査では、赤飯、精進料理、寿司料理について、関東調査では、できなかった具体的な内容について質問を行った。

関東調査の行事の認知は、図1のとおりで、「重陽」18～29歳19.6%～60歳以上32.8%と低く、次いで「春・秋祭り」18～29歳15.8%～60歳以上43.9%と低い。やや低いのが「盂蘭盆」で、18～29歳53.1%～50歳代73.8%である。その他の行事は、75%以上と多い認知である。年代別にみると、他の年代に比べて、60歳以上が多い行事は、「盂蘭盆」73.5%、「重陽」32.8%、「春・秋祭り」43.9%、38.1%であり、18～29歳では、「節分」89.0%、「上巳」89.3%、「七夕」92.0%、「クリスマス」95.5%、「大晦日」95.8%である。その他の行事の認知は、40歳代、50歳代に多い。

関東調査の儀礼の認知は、図2のとおりで、若い年代では、経験がないと思われる儀礼については、認知が低い。年代別でみると、18～29歳で多い儀礼の認知は、「誕

3. 調査結果

1) 調査対象者の属性

表1のとおり、年代別の関東調査は、20歳未満34.2%、20歳代29.5%、40歳代16.4%、50歳代14.6%、60歳以上5.3%である。本学調査は、20歳未満44.6%、20歳代55.4%である。

居住地区の関東調査は、東京都、千葉県、茨城県、埼玉県、神奈川県、栃木県、群馬県の順で多く、本学調査は、埼玉県、東京都、千葉県、神奈川県、茨城県、栃木県、群馬県の順で多く、ほとんどが1都6県内に居住している。

家族構成は、関東調査、本学調査ともに、2世代が多く、核家族化の傾向がわかる。特に本学調査では、学生が多いこともあり、二世世代の割合が、関東調査よりも多い。

2) 行事および儀礼の認知および経験

行事食に影響を及ぼしているのは、関東調査では、「母方」57.4%、「父方」14.3%、「わからない」14.0%である。本学調査では、「母方」55.6%、「父方」18.2%、「わからない」17.4%であり、両調査共に母方が半数以上と多い。

各行事と儀礼の認知と経験は、年代別との関係で、 χ^2 検定において、いずれも有意に差があることが認められた。

表1 調査対象者の属性

		関東調査 n=3,570	本学調査 n=489
年代	20歳未満	1,221 (34.2)	218 (44.6)
	20歳代	1,052 (29.5)	271 (55.4)
	40歳代	586 (16.4)	
	50歳代	522 (14.6)	
	60歳以上	189 (5.3)	
	住所	東京都	702 (19.7)
	神奈川県	359 (10.1)	47 (9.6)
	埼玉県	468 (13.1)	167 (34.1)
	千葉県	618 (17.3)	62 (12.7)
	茨城県	571 (16.0)	13 (2.7)
	栃木県	340 (9.5)	13 (2.7)
	群馬県	244 (6.8)	5 (1.0)
	その他	242 (6.8)	17 (3.5)
	無回答	26 (0.7)	
家族構成	同世代	936 (26.2)	49 (10.0)
	2世代	1,630 (45.7)	322 (65.9)
	3世代	592 (16.6)	48 (9.8)
	4世代	11 (0.3)	1 (0.2)
	一人暮らし	330 (9.2)	65 (13.3)
	その他	45 (1.3)	3 (0.6)
	無回答	26 (0.7)	1 (0.2)

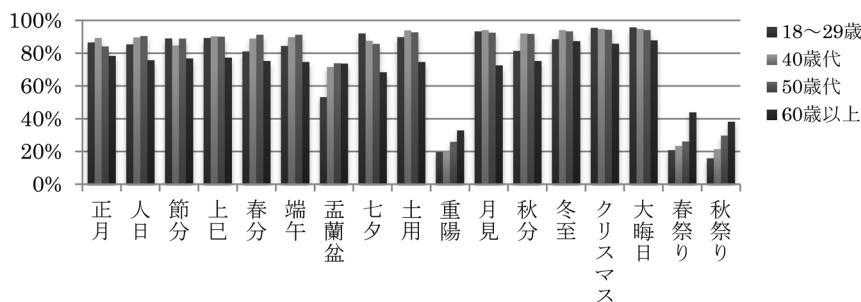


図1 年代別の行事の認知度（関東調査）

行事食および儀礼食に関する実態と意識について

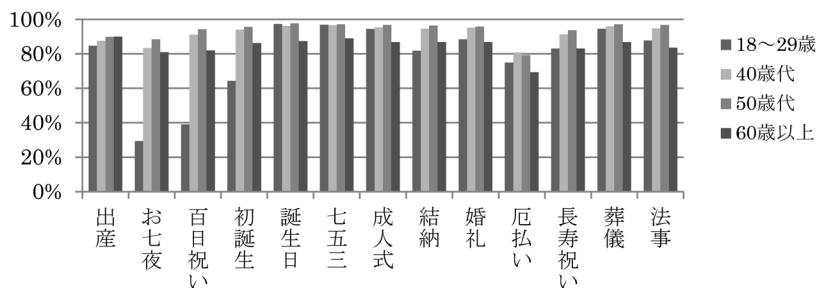


図2 年代別の儀礼の認知度 (関東調査)

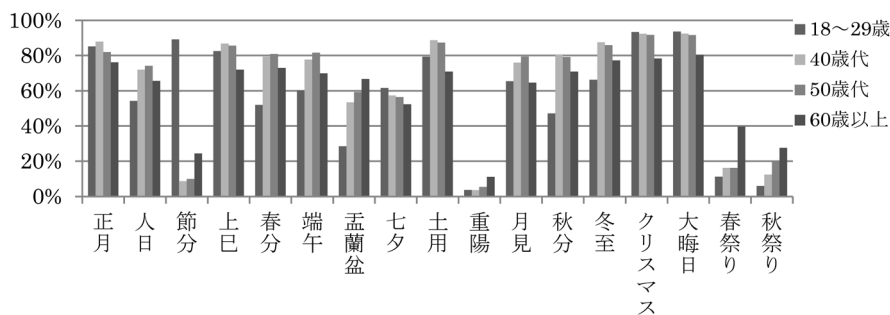


図3 年代別の行事の経験 (関東調査)

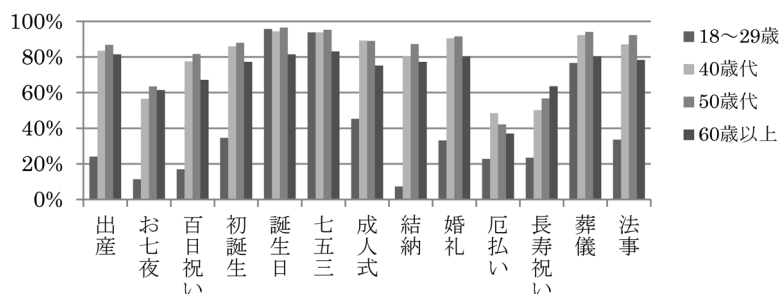


図4 年代別の儀礼の経験 (関東調査)

生日」97.3%、「七五三」96.9%、「成人式」94.5%であり、その他の儀礼の認知は、50歳代で79.1~97.7%と多い。

関東調査の行事の経験は、図3のとおりで、行事によって年代別にばらつきが見られる。60歳以上で経験が多い行事は、「盂蘭盆」66.7%、「重陽」11.1%、「春・秋祭り」39.7%、27.5%であり、50歳代で、「人日」74.1%、「春分の日」80.8%、「端午」81.6%、「月見」79.5%である。40歳代では、「正月」87.9%、「上巳」86.9%、「土用」88.7%、「秋分の日」80.4%、「冬至」87.5%であり、18~29歳では、「節分」89.2%、「七夕」61.6%、「クリスマス」93.4%、「大晦日」93.6%である。全体的には、認知よりも経験のほうが低い値である。

関東調査の儀礼の経験は、図4のとおりで、若い世代では、経験がない儀礼もあるが、年代別にみると、全体に50歳代が多い割合を示している。50歳代以外の年代で多い儀礼は、60歳代で「長寿祝い」63.5%、40歳代で「成人式」89.2%、「厄払い」48.5%である。

3) 若い年代の行事・儀礼に対する関心

本学調査の20歳未満、20歳代で行事を大切にしたいと思っている人は、「非常にそう思う」17.4%、11.4%、「そう思う」61.9%、57.6%と多い。儀礼についても「非常にそう思う」16.5%、10.3%、「そう思う」62.8%、60.5%と多い。また、行事や儀礼に関心がある、と思っている人も「非常にそう思う」22.5%、12.2%、「そう思う」67.4%、68.3%と多い。

そして、次世代に行事や儀礼を引き継ぎたいと思っている人は、「非常にそう思う」26.6%、18.1%、「そう思う」65.6%、73.4%と多い。

4) 赤飯と行事および儀礼

関東調査では、図5のとおり、年代別にみると行事で赤飯を摂取するのは、60歳以上が多く、「正月」34.4%、「端午」43.9%、「七夕」11.1%である。

儀礼では、60歳代か、50歳代に多い。60歳以上では、

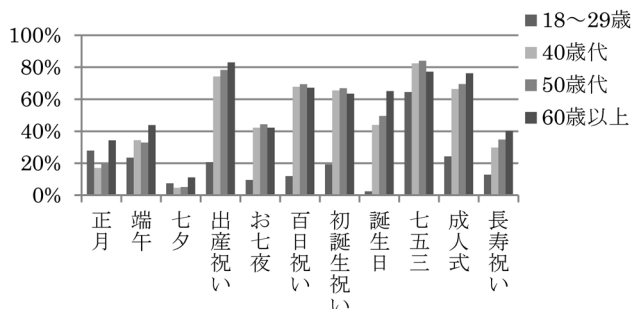


図5 年代別に見る行事および儀礼の赤飯摂取 (関東調査)

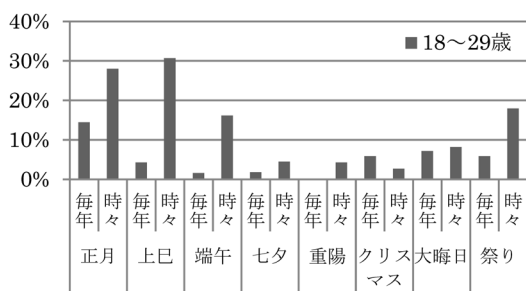


図6 行事での赤飯摂取状況 (本学調査)

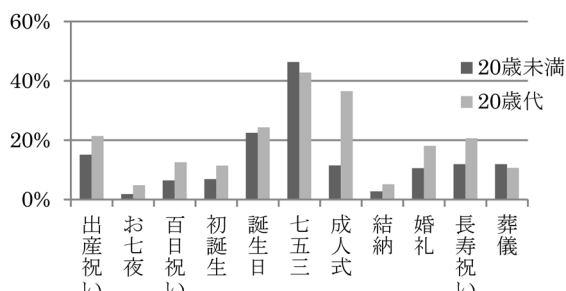


図7 儀礼での赤飯摂取の経験 (本学調査)

「出産祝い」83.1%、「誕生日」65.1%、「成人式」76.2%、「長寿祝い」40.2%であり、50歳代では、「お七夜」44.4%、「百日祝い」69.3%、「初誕生祝い」66.9%、「七五三」84.1%である。

本学調査での赤飯の摂取状況は、図6のとおり少なく、「毎年食べる」と「時々食べる」を合わせても「正月」42.5%、「上巳」35.0%、「端午」17.8%、「七夕」6.3%、「重陽」4.5%、「クリスマス」8.6%、「大晦日」15.4%、「祭り」23.9%である。

本学調査では、赤飯を摂取する時は、20歳未満、20歳代で、「祝いの時」20.6%、20.7%であり、「食べたい時」11.9%、18.5%である。

図7の儀礼での赤飯の摂取状況は、「七五三」や「成人式」が多い。18~29歳の年齢なので、経験した儀礼かどうか、によって異なる点もあるが、核家族、少子化、親戚との付き合いの程度など、いくつかの要因も考えられる、と思われる。

赤飯を作らない理由は、20歳未満、20歳代で、「面倒だから」19.3%、25.5%、「なくてもよいから」14.2%、16.2%、「作り方を知らないから」18.3%、6.6%、「嫌いだから」5.5%、7.7%、「家族が食べないから」6.4%、4.1%、「材料の購入が面倒だから」2.8%、5.2%である。

葬儀の時の赤飯摂取は、「長寿で亡くなったから」0.9%、0.4%、「理由はわからないが、食べたことがある」17.0%、14.4%、「食べていないが知っている」2.3%、4.1%である。葬儀の時の赤飯の種類は、「普通の赤飯」21.1%、19.2%、「白い赤飯」9.6%、11.4%である。

赤飯を次世代に伝承したい人は、「非常にそう思う」22.5%、22.1%、「そう思う」60.6%、63.8%、「あまり思わない」14.2%、11.8%、「思わない」0.9%、1.5%である。

祝いの時の食事形態は、「外食」19.7%、24.7%、「宅配、中食」7.8%、6.3%、「好きなものを食べる」64.2%、64.2%、「特別に食べない」2.3%、3.0%である。

祝いの時に決まって食べるものは、「和食」13.3%、12.2%、「洋食」15.6%、8.9%、「特に決まっていない」71.6%、76.4%である。

祝いの時に食べるものは、「魚料理」15.6%、14.4%、「肉料理」15.6%、12.9%、「寿司」32.6%、29.9%、「郷土料理」1.4%、5.2%、「ケーキ」47.7%、53.5%、「お菓子」7.8%、9.2%、「果物」1.8%、1.8%である。

赤飯の調理経験は、「作ったことがある」38.5%、46.1%、「作るのを手伝ったことがある」12.4%、18.1%、「作るのを見たことがある」19.3%、19.6%、「作り方が全くわからない」25.7%、10.7%、「作ろうと思わない」4.1%、5.2%である。

赤飯の食べ方は、「手づくり」44.0%、52.4%、「購入する」28.9%、24.7%、「他所からいただく」18.3%、19.6%、「外食」0.5%、0.7%、「レトルト」5.5%、10.3%である。

赤飯の材料は、「小豆」32.6%、26.2%、「ささげ」17.0%、29.2%、「甘納豆」0.9%、0.4%、「もち米のみ」31.7%、28.4%、「もち米と米のブレンド」16.5%、25.8%、「栗」4.1%、6.3%、「しょうゆ」0.5%、1.8%、「塩」17.4%、27.3%、「酒」2.8%、8.1%である。

そして、赤飯にかけるものは、「黒ゴマ塩」45.9%、49.8%、「白ごま塩」4.6%、3.7%、「塩のみ」1.4%、0.7%、「かけない」0.5%、1.8%である。

5) 精進料理と行事および儀礼

関東調査で、精進料理を食べたことがある人は、年代別では、図8のとおりで、60歳以上が最も多いのは、「春分の日」29.6%、「秋分の日」28.0%、「盂蘭盆」39.7%で

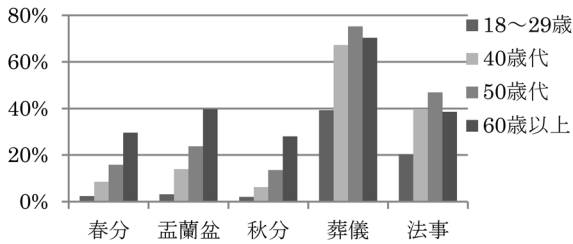


図8 年代別にみる行事および儀礼の精進料理摂取 (関東調査)

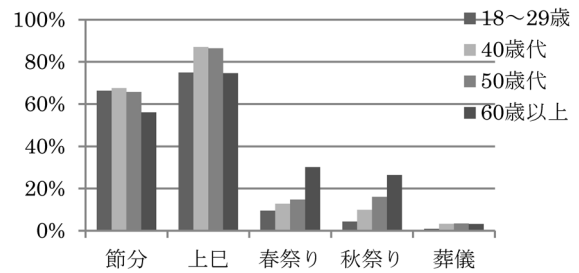


図9 年代別にみる行事および儀礼の寿司摂取 (関東調査)

50歳代が最も多いのは、「葬儀」75.3%、「法事」46.9%である。全体に精進料理の摂取は、若い年代には少ない。

本学調査の20歳未満と20歳代で、彼岸に精進料理を「毎年食べる」1.8%、0.7%、「時々食べる」5.0%、6.6%、「途中から食べるようになった」1.4%、0.4%である。盂蘭盆に精進料理を「毎年食べる」0.5%、1.1%、「時々食べる」2.8%、2.2%である。また、葬儀で「食べたことがある」15.6%、11.1%、「法事」14.2%、12.5%である。

精進料理を「手づくり」11.0%、8.9%、「購入」12.4%、8.1%、「他所からいただく」2.3%、4.8%、「外食」11.5%、17.0%である。精進料理を作った経験は、「作ったことがある」2.3%、12.5%、「料理を手伝ったことがある」6.9%、5.9%、「料理を作るのをみたことがある」9.6%、5.9%、「精進料理は全く分からない」59.6%、32.5%、「作ろうと思わない」11.0%、30.3%である。

精進料理を作らない理由は、「面倒」5.0%、12.9%、「嫌い」1.8%、3.7%、「あえてなくてもよい」16.5%、37.6%、「家族が食べない」8.3%、5.2%、「材料の購入が面倒」1.8%、1.1%、「作り方を知らない」50.0%、19.9%、「他に美味しいものがある」5.0%、6.3%である。

精進料理を次世代に伝承したい人は「非常にそう思う」9.2%、5.5%、「そう思う」54.6%、49.8%、「あまり思わない」31.2%、36.5%、「思わない」2.3%、5.2%である。

6) 寿司と行事および儀礼

図9の通り、関東調査で年代別に一番多い寿司の摂取は、行事の「節分」で18~29歳66.3%、「上巳」40歳代87.0%、「春祭り」60歳以上30.2%、「秋祭り」60歳以上26.5%である。儀礼の「葬儀」は、50歳代3.4%が多い。

本学調査の行事での寿司の摂取は、「毎年食べる」と「時々食べる」を合わせると、全体で多い行事の順は、「正月」72.2%、「上巳」68.9%、「大晦日」40.3%、「節分」39.3%、「クリスマス」36.0%、「祭り」31.9%、「端午」21.7%、「七夕」18.6%、「彼岸」16.2%、「盂蘭盆」9.4%、「重陽」5.1%である。

本学調査の儀礼での寿司の摂取は、図10のとおりで、寿司を食べたことがあるのは、20歳未満と20歳代では、

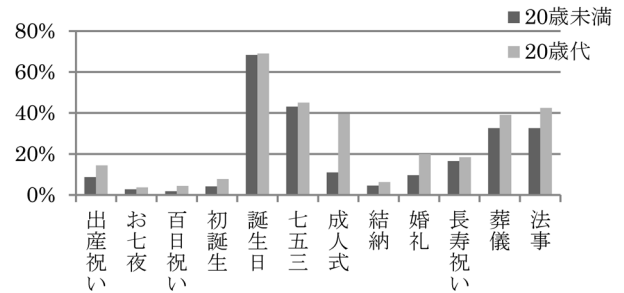


図10 儀礼の寿司摂取 (本学調査)

「出産祝い」8.7%、14.4%、「お七夜」2.8%、3.7%、「百日祝い」1.8%、4.4%、「初誕生」4.1%、7.7%、「誕生日」68.3%、69.0%、「七五三」43.1%、45.0%、「成人式」11.0%、39.5%、「結納」4.6%、6.3%、「婚礼」9.6%、19.9%、「長寿祝い」16.5%、18.5%、「葬儀」32.6%、39.1%、「法事」32.6%、42.4%である。

寿司を食する時は、「普段の食事で食べる」20.6%、25.5%、「外食」9.6%、7.0%、「祝いの時」6.0%、3.0%、「来客の時」1.4%、3.3%、「親戚が来た時」1.8%、1.1%である。

寿司の食べ方は、「購入」67.0%、63.5%、「手づくり」23.9%、26.6%、「外食」22.0%、18.1%、「他所からいただく」2.3%、2.2%である。

作る寿司の種類は、「散らし寿司」54.6%、57.6%、「手巻き寿司」31.7%、27.3%、「太巻き寿司」20.2%、15.1%、「握りずし」15.1%、22.1%、「稲荷ずし」14.7%、16.2%、「細巻きずし」8.7%、7.0%、「押しずし」2.3%、1.8%である。

寿司を作らない理由は、「面倒」25.7%、28.8%、「材料の購入が面倒」9.6%、11.4%、「あえてなくてもよい」4.6%、4.8%、「他に美味しいものがあるから」4.1%、4.1%、「作り方を知らない」2.3%、1.8%、「家族が食べない」1.4%、0.7%、「嫌い」0.9%、1.5%である。

寿司を次世代に伝承させたい人は、「非常にそう思う」29.8%、26.9%、「そう思う」61.9%、61.3%、「あまり思わない」6.9%、10.0%、「思わない」0.9%、0.4%である。

4. 考 察

1) 行事および儀礼の認知および経験

行事食の影響は、母方と回答した人は、関東調査、本学調査のいずれも60%弱であり、全国調査の報告⁸⁾ 54.5%より多い。

行事の認知は、重陽、祭りが少なく、やや少ないのは、盂蘭盆である。本調査と同様な調査結果を得ている調査報告^{9)~12)}がある。その他の行事では、認知の割合は多い。

年代別では、60歳以上に多い行事は、盂蘭盆、重陽、祭りであり、若い年代で多い認知の行事は、節分、上巳、七夕、クリスマス、大晦日である。保育園、学校などで行われる行事は、若い年代の認知が高いと思われる。また、盂蘭盆や重陽は、核家族化の影響があり、少ないと思われる。

儀礼の認知は、年代別で若い年代に多いのは、誕生日、七五三、成人式で、自分が経験したと思われる儀礼が多い。その他の儀礼の認知で高い年代は、50歳代である。家族構成別にみた調査報告¹³⁾では、三世代、四世代の儀礼の認知が多く、核家族化や社会環境の変化などの影響があると考えられる。

行事の経験は、認知と同様な結果で、60歳以上に高い経験は、盂蘭盆、重陽、祭りである。しかし、認知よりは経験の割合の方が少ない。若い年代の行事の経験でも同様のことがいえる。

儀礼の経験でも50歳代の経験が多く、認知と同様な結果である。

全体に経験のほうが、行事および儀礼においても年代別に差が見られる。

2) 若い年代の行事・儀礼に対する関心

18~29歳の若い年代で、行事を大切にしたいと思っている人は、非常にそう思う、そう思う、を合わせると74.2%と多く、儀礼についても75.1%と多い。そして、次世代に行事や儀礼を引き継ぎたいと思っている人は、非常にそう思う、そう思う、を合わせると85.2%と多い。菅原ら¹²⁾は、行事食では、親が認知し、かつ経験していることは子にも伝承されているが、儀礼食では、親のみ認知し、経験していることがうかがえた。と報告している。伝承したいという気持ちを忘れずに子に伝えていくことが必要であると考えられる。

3) 赤飯と行事および儀礼

年代別にみた行事で赤飯を摂取するのは、60歳以上に多く、また、儀礼については、50歳代および60歳以上に多い。赤飯を摂取する割合は、行事よりも儀礼のほうが多い。赤飯の摂取は、三世代で、出産祝い、お七夜、初誕

生、誕生日、成人式に有意に多く、二世代で、出産祝い、百日祝い、初誕生に有意に多いことが報告¹³⁾されていて、儀礼での摂取で、年代の高い人がいる家庭で食されていることがわかる。

18~29歳の赤飯の摂取は、七五三や成人式が多く、自分が経験したと思われる儀礼である。誕生日に赤飯を食べるのは、414人中18人と報告¹⁴⁾されているものもある。

赤飯を作るのは、祝いの時20%である。20・30歳代で祝い事約1/4、仏事約1/4、残りは、その他と報告¹⁵⁾しているように、赤飯を食べる割合は少ない。また、作らない理由として、面倒、なくてもよい、作り方を知らないなどがある。

葬儀の時の赤飯の摂取は、食べたことがある人は、15%程度と少ないが、葬儀だけではなく、通夜、初七日などでも使われる地域もある。

赤飯を次世代に伝承したいと思っている人は、非常にそう思う、そう思う、を合わせると85%程度いる。他の報告¹⁴⁾でも伝承したい料理の上位にある。

祝いの時には、ケーキを食べるが、50%程度いて、赤飯より多い。

赤飯は、手づくりが50%弱で、他の報告¹⁵⁾も同じような結果である。

4) 精進料理と行事および儀礼

年代別で精進料理を食べたことがある人は、60歳以上に多く、彼岸、盂蘭盆であり、50歳代で、葬儀、法事である。

18~29歳では、葬儀と法事で、それぞれ約13%程度である。精進料理は、作り方もわからない、なくてもよい、という回答が多く、また、次世代へ伝承したいと思う人は、非常にそう思う、そう思う、を合わせると6割程度と少ない回答である。ダイエットの時に食べるなどの回答もあったが、全体に関心は低い。

5) 寿司と行事および儀礼

年代別にみた寿司の摂取は、行事では、節分は20歳代に、上巳は50歳代に、祭りは60歳以上に多い。溯上らの報告⁸⁾でも祭りの時の寿司の摂取は、50%弱と多い。

18~29歳の寿司の摂取の多い行事は、正月、上巳は50%以上の摂取で、大晦日、節分は40%程度の摂取である。寿司の摂取は、普段の日の摂取が多く、購入して食べられている。家で手作りするのは、25%程度と少ない。作る寿司は、散らし寿司や手巻き寿司が多い。

寿司を次世代に伝承したい人は、90%程度と多い。長尾ら¹⁴⁾の報告でも伝承したい料理の上位に入っている。

5. ま と め

関東（1都6県）の調査対象者は、女性で、20歳未満、20歳代、40歳代、50歳代、60歳代以上の計3,570名と本学学生および卒業生で、20歳未満、20歳代の計489名を年代別にして行事と儀礼の認知および経験、そして、赤飯、精進料理、寿司について検討した。

行事や儀礼の食事について、赤飯や精進料理そして、寿司が伝承されているか、検討したが、次世代に伝えたい、という意識はあるものの、実際に食べているのは、少ない傾向がうかがえる。特に精進料理については、伝承したいという思いは少ない。

これらの料理は、普段の食事では食され、行事や儀礼時には、好みに合った別の料理を食べている。また、赤飯、精進料理、寿司の料理は、手づくりではなく、購入をしたり、外食をしたりと、食べたい時に喫食している様子がわかる。また、若い年代では、これらの料理が、あまり好まれていない傾向もうかがえるし、料理の作り方がわからない、作ろうと思わない、などという回答も多く、若い世代への伝承は難しいと思われる。家庭での食事作りと地域や周りの人々との積極的な関わりから伝承の機会を作る方法を検討していく必要があると考える。

謝 辞

本研究は、平成21～23年度日本調理科学学会特別研究により行うことができました。また、アンケート調査にご協力いただきましたの方々のもとに進めさせていただきました。そして、東京家政大学生生活科学研究所の「総合研究（温故知新）プロジェクト、東和食品研究振興会」よりの助成を受けて行いました。

研究をすすめるにあたり、関係各位に厚く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 農林水産省（2014/11/21）：「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されました！. [http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/\(2015/1/6\)](http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/(2015/1/6))
- 2) 吉川誠二編著、江後迪子、下村道子、高正晴子、橋本慶子：食文化論。生活科学双書（2008）。
- 3) 柳田国男：年中行事覚書。講談社学術文庫（1977）。
- 4) 三隅治雄編者：全国年中行事辞典。東京堂出版（2007）。
- 5) (社)農山漁村文化協会編者：聞き書 ふるさとの家庭料理。社)農山漁村文化協会（2004）。
- 6) 石毛直道監修 他：食の文化 第六巻 食の思想と行動。(財)味の素食の文化センター（1999）。
- 7) 厚生労働省（2009/2）：www.mhlw.go.jp/shingi/2009/02/dl/s0224-8h_0005.pdf, 共働き世帯の増加（2015/1/27）。
- 8) 渕上美智子、葉田寛子、石井香代子、木村安美：特別研究「調理文化の地域性と調理科学：行事食・儀礼食」—全国の報告—行事食・儀礼食の認知・経験・喫食状況。日本調理科学会誌, 44(6), 436-441（2011）。
- 9) 鷲見裕子：行事食に関する意識と実態。高田短期大学紀要, 30, 141-150（2012）。
- 10) 佐藤幸子、山本千華、加藤里美、高梨 萌、渡邊綾香：「行事食・儀礼食」調査研究の一考察。戸板女子短期大学部年報, 第53号, pp. 1-14（2010）。
- 11) 山村涼子、山下浩子、眞谷智美、高松幸子：行事食に関する調査研究 第1報。久留米信愛女学院短期大学研究紀要, 第53号, pp. 59-67（2011）。
- 12) 菅原久美子、菊池和美、木下教子、酒向史代：北海道の行事食・儀礼食の特徴および親子間における伝承。日本調理科学会誌, 47(1), 31-41（2014）。
- 13) 宇和川小百合：家族構成にみる行事食と儀礼食の実態調査。東京家政大学研究紀要, 53(2), 39-51（2013）。
- 14) 松本美鈴：現代家庭における年中行事と食べ物。青山学院女子短期大学総合文化研究所年報, 14, 3-20（2006）。
- 15) 長尾慶子、大久保洋子：日本の行事食に関する研究（第1報）—本学の短大生家庭における伝承調査—。文教大学女子短期大学部研究紀要, 第44集, pp. 87-94（2000）。
- 16) 成田亮子、加藤和子、長尾慶子：本学学生および卒業生の家庭における赤飯の摂取状況調査。東京家政大学研究紀要, 第46集（2）, pp. 29-35（2006）。